

## 小学校社会科における伝統・文化学習のモデル授業開発

—第6学年単元「室町文化」における態度形成を視点として—

A Development of the Model Lesson Concerning the Tradition/Culture in the Elementary School  
Social Studies: A Viewpoint of the Manner Formation about the Unit of “Muromachi Culture”  
in the 6th Grade

大畑 健実

(島田市立島田第五小学校)

### I はじめに

伝統・文化学習<sup>1)</sup>においては、日本の伝統文化や地域文化に対して、自己の文化としての愛情を持ち、そのよさを継承・発展させるための学習が求められている<sup>2)</sup>。単に文化に関する知識を知っているだけでは、愛情を持ち、その文化を育ててきた社会の形成者育成には結びつかないであろう。

しかし、子供たちの日常生活は、地域社会との関わりが希薄となり、日本の伝統や文化、地域の文化に触れる機会が極めて少ない状況にある。そのため、生活の中で人との関わりを通して学ぶ知識や経験が不足し、自己の価値感と結びついた伝統や文化に対する興味・関心が低下している状況にある<sup>3)</sup>。

小学校社会科においては、3,4年生では、地域の発展につくした人物や地域の文化財を取り上げた学習、5年生では、地域産業や伝統工芸を取り上げた学習、6年生では、室町や江戸時代の文化を教材とした歴史学習において伝統・文化に関する多くの実践が取り組まれている。しかし、それらは、日本の伝統や文化、地域の歴史や人物に関する知識を獲得する学習に止まっている。伝統や文化の持つ価値について考え、自分の中にある文化として文化価値を感じ取る学習までには至っていない。そのため、伝統や文化を自己や自国の誇るべき文化として自らの態度形成や人間形成に役立てるための発展的・創造的な学習に結びついていけないという問題点が指摘できる。

これらの伝統・文化学習の問題に対して中村哲は、日本の伝統文化を型の習得を通じた文化創造の学習活動として和文化教育を提唱している<sup>4)</sup>。しかし、和文化教育の理念やカリキュラムレベル

での事例分析に止まり、社会科授業における授業論にまでは及んでいない。田中伸は、小中学校社会科における文化学習を改善するために、知識を受容する学習から意味を解釈する学習への授業モデルを提示している<sup>5)</sup>。このモデルは、単元レベルでの基本構想は提示されているものの具体的な授業構成や展開方法の提示までには至っていないところに問題点が指摘できる。

小学校社会科において伝統・文化学習を実践するためには、伝統や文化に関する知識理解を深めるとともに文化自体が持つ価値や現代生活の中でも生き続ける文化への愛情を育て、自己の生き方との関連の中で文化を発展させていくための学習が重要となる。そのためには、どのような教材を取りあげて内容を構成し、どう授業として展開すればよいのかという授業構成について明らかにすることが課題となる。

そこで、本研究においては、小学校社会科において伝統や文化を取りあげた授業実践92単元112時間の事例を収集した。それらの授業実践事例を構成内容と展開方法の視点から類型化する。そして、各類型の典型的事例の分析を通して、授業構成に見られる特性や課題を明らかにする。更に、実践事例分析によって得られた成果に基づいて、文化価値の理解を深めるための学習・主体的に文化発展に取り組む態度育成を図るための学習に視点をあてたモデル授業の開発を目的とする。モデル授業は、筆者が勤務する地域に伝わる静岡県無形文化財である「猿舞」を教材化した小学校6年社会科単元「室町文化～県無形文化財 猿舞と私」とする。

## II 伝統・文化学習における社会科授業構成の視点と類型

### 1 伝統・文化学習における社会科授業構成の視点

社会科において伝統・文化学習に取り組むためには、学習者にどのような学力を身につけるのか。そのために、どのように教材を構成し、展開するのかという授業構成を明確にする必要がある。

しかし、従来から実践されてきた伝統・文化に関する地域学習、伝統産業学習、歴史学習で取り上げられてきた教材は、伝統・文化の視点から構成内容が明確にされることは少なかった。

そこで、伝統・文化を視点とする社会科授業実践が、どのような教材によって授業が構成されているのかを明らかにする。そのため、平成20年度版学習指導要領で示された伝統や文化に関する教材を時間軸を視点による構成内容の視点から分類することとした。なぜなら、伝統や文化を文化遺産に関する知識の獲得を中核的内容とするのか、または、現在の生活の中に生きる文化を受け止め、未来に向かっての創造のための文化内容として考えるのかによって学習者の視線や学習内容の受け止め方が異なってくるからである。

社会科における伝統・文化に関する教材の構成を時間軸による構成内容の視点から分類すると「歴史的文化教材」と「持続的文化教材」に分類することができる。文化を過去の歴史的文化教材とする歴史的文化教材は、過去に視線を向け、過去の文化を知り、その価値を理解するための授業構成が中核となる。時間軸で考えれば、過去の学習、過去と現在を結びつける構成内容となる。一方、文化を連続する生活としての教材とする持続的文化教材は、学習者が過去から現在への継承に視線を向けた学習、現在から未来への発展に視線を向けた学習が展開される授業構成となる。

次に、伝統・文化を視点とした授業の構成を明らかにするために学習目標具現化のためにどのように授業を展開するのかという展開方法の視点から分類することとした。伝統・文化学習の目標は、中央教育審議会答申において「国際社会で活躍する日本人の育成をはかる上で、我が国や郷土の伝統や文化を受け止め、そのよさを継承・発展させ

るための教育を充実することが必要である」と示されている<sup>7)</sup>。この目標を社会科に引き寄せて考えてみる。社会科の目標は、学習指導要領においては、理解に関する目標、態度に関する目標、能力に関する目標に分類されて記述されている<sup>5)</sup>。伝統・文化に視点をあてた授業を展開する場合も、「知る」「分かる」「理解する」などの知識理解に関する学習と「関心を持つ」「自覚を育てる」などの態度育成に関する学習、表現する力や資料活用力を育成のための能力に関する学習が相互に関連し合いながら伝統や文化を尊重する態度や資質の育成に結びつくと考える。

上記の目標に対応した学習をどのように構成していくのかという展開方法に視点をあてると各学習に対応して三つに分類することができる。第一は、5W1Hに関する知識内容や教科書等に記述されている価値付けを理解させるための展開を「知識習得」とする。この分類においては、理解に関する目標が中心となり、「調べる・知る・分かる」ための学習活動が展開の中心となる。第二は、文化自体が持つ価値、長い年月にわたって継承されてきた価値について資料を活用したり、体験をしたりする学習活動を通して感じ取り、自己の価値として受け止める学習を重視した展開方法である。これを「価値理解」とする。第三は、伝統や文化に対する自分なりの価値観を評価し、それらを尊重しようとする態度育成を展開の中心とする「態度形成」として分類する。

### 2 類型視点に基づいた社会科授業実践の類型化

社会科授業実践事例の授業構成を明らかにするために「構成内容」と「展開方法」を視点に収集した実践事例を類型化すると表1のようになる。

歴史的文化知識習得型は、「～時代の文化を知る」「～という文化が生まれたことが分かる」などの知識習得が展開の中心となる。歴史的文化価値理解型は、文化そのものの価値に着目し、体験活動等を組み入れて、その価値を感じ取ったり、実感したりするなどの展開方法が用いられる。歴史的文化態度形成型は、「なぜ、多くの人に広がったのか」「どのように受け継がれてきたのだろうか」などの継承されてきた文化に対する価値を発見し、自分なりの文化に対する受け止めを表現し

表1 授業構成による社会科授業実践事例の類型化

構成内容	展開方法	知識習得	価値理解	態度形成
歴史的な文化教材(27)		歴史的な文化知識習得型(14)	歴史的な文化価値理解型(12)	歴史的な文化態度育成型(1)
持続的な文化教材(85)		持続的な文化知識習得型(34)	持続的な文化価値理解型(42)	持続的な文化態度育成型(9)

※ ( )の数字は事例数を示している。

たり、身近にある類似した文化遺産を発展的に調べたりする学習を展開する。ここでの学習者の視線は、過去に向けられている。

持続的な文化知識習得型は、「～当時の人々生活にどのように結びついていたのだろうか」「人々の生活の向上にどう結びついていたのか」などと生活に根ざした文化として日常生活の中で用いられている文化を調べ、過去の生活の様子を知る学習が中核となる展開方法である。持続的な文化価値理解型は、「自分たちの生活の中で受け継がれた文化がどのように現代に生きているのか」「なぜ現代でも受け継いでいるのか」などと過去と現在を時間軸の上で結びつけ、過去の文化の価値をどのように受け止めているのかを見つめ直す学習が展開される。持続的な文化態度育成型は、文化がより発展するために「～を提案する」「発展を願う意識を育てる」「アイデアづくりに取り組む」などと文化価値を自分の中の文化として受け止め、その発展について考える学習を展開する。時間軸の上で過去・現在・未来を結びつる学習が展開される。

### III 伝統・文化に視点をあてた社会科授業実践事例分析

収集した112事例は、構成内容の分類では、歴史的な文化教材が27事例、持続的な文化教材が85事例である。展開方法の分類では、知識習得が48事例、価値理解が54事例、態度形成が10事例であった。また、学年別では、3年23事例、4年41事例、5年10事例、6年17事例であった。

本研究では、展開方法における価値理解、態度形成に着目している。そのため、歴史的な文化教材・持続的な文化教材とも価値理解・態度形成の展開方法の事例に重点をおいて分析する。

#### 1 歴史的な文化教材の実践事例分析

#### (1) 歴史的な文化知識習得型の実践事例分析

ここでは、大阪市立鶴橋小学校の小坂一郎・浅井孝子の「江戸時代の文化と新しい学問」を取りあげて分析する<sup>9)</sup>。

本実践は、「文楽と近松門左衛門」「朝鮮通信使と江戸時代の文化交流」などの内容によって9時間で単元が構成されている。単元目標は、「江戸時代の文化に関心を持ち、絵やVTR、文書資料などを使って、文楽や浮世絵、国学・蘭学、朝鮮通信使などについて調べることにより、江戸時代には町人文化が栄えたことや、新しい学問が生まれたこと、また、外国との文化交流がさかんに行われていたことなどについて理解することができる」と設定されている。

第1時では、地元の大阪にある朝鮮通信使に関する写真資料を提示し、大阪にも朝鮮の文化が残っていることから学習への興味を高め、「朝鮮通信使について調べよう」と学習課題を提示する。

子供たちは、地図や文書資料を手がかりに調べ、朝鮮通信使が各地でさまざまな文化交流を行ったこと、それらが日本の文化に影響をもたらしたことなどについて考える。最後に大阪の四天王寺ワッソの写真を提示し、今も地元に残る江戸時代の文化に関心を持たせて学習を終わる。

本実践は、資料を手がかりとした調べ学習に陥りがちな江戸時代の文化を地元に残る朝鮮通信使の遺跡と結びつけて学習への意欲を高めている。更に、文化遺跡を手がかりに朝鮮の文化が日本に及ぼした影響を考えさせようとしているところに特性が見られる。しかし、「気づく」「調べる」「考える」などと目標に設定されてるように江戸時代の文化に関する知識内容を中心に獲得させる学習活動を中核としている。この展開は、単元の「文楽」「学問」の学習においても同様である。文化遺跡という現代の生活と結びつけるための教材

の構成内容に着目しているものの、どの時間においても、それらを過去の文化として調べる、理解させるための展開方法となっているところに問題点が指摘できる。

## (2) 歴史的文化価値理解型の事例分析

ここでは、教科書記述に見られる文化内容と地元芸能を結びつけた周南市立三丘小学校の藤本浩行氏による「江戸の文化をつくりあげた人々」の実践を分析対象として取り上げる<sup>9)</sup>。

本実践は、「社会が安定するにつれて歌舞伎や浮世絵などの町人文化が栄えたこと、国学や蘭学などの新しい文化が起こったことを地域の歴史的な施設や事物との関連で理解できるようにする」を単元のねらいとしている。第一次では、「江戸時代の人々の楽しみは何か？」の問いかけによって浮世絵、伊能忠敬の業績、新しい学問などの江戸時代の文化の発展に尽くした人々の業績を調べる学習を展開する。

第二次では、校区内にある江戸時代末期に阿波の藍染職人が伝えたと言われる県指定無形民俗文化財「安田の糸あやつり人形芝居」を取り上げている。人形芝居が上演されていた和霊大明神や保存会の道具置き場「三丘徳修館」などの学区内をフィールドワークして歴史家や人形浄瑠璃の保存会の方々へも郷土の歴史についてインタビューをしている。

第三次では、教科書の歴史年表に「自分たちの住んでいる地域に阿波の藍染商人が人形浄瑠璃を伝承したと言われる絵は江戸時代末期」「他の芸能に押されて、人形浄瑠璃は衰退し始めた頃」「郷土の人形浄瑠璃を保存していこうと保存会ができる」などと時間の流れを記入させる。

本実践は、江戸文化を子供たちの身近な地域教材と結びつけ、知識内容として知るだけでなく、現在の生活と結びつけた教材として構成している。また、教科書を活用して、教科書記述について個々に調べ学習をした後に、学区内に残されている人形浄瑠璃、歴史家への取材、フィールドワークや体験、調査活動を組み入れ、実感として受け継がれてきた文化の価値を感じ取らせようとしている。更に、教科書や資料の内容と地元の伝統文化を結びつけ、全国の出来事と地元の歴史を同じ年表の

中に作成することによって全国史と地元史を結びつけ、文化を生み出す歴史的背景にも着目させている。

しかし、江戸の文化が自分たちの身近なところにも存在し、無形文化財として現在まで引き継がれているという価値理解が過去から現在までの時間で止まっている。総合的な学習で活動を体験しているものの、現代まで引き継がれてきた地域の文化が自分たちの生活の中にどのように生き続けているのかに着目される学習への発展が見られないという問題点も指摘できる。

自分たちの生活の中にある人形浄瑠璃の存在を振り返ったり、人形浄瑠璃の持つすばらしさに触れたりする学習を通して、今も受け継がれている江戸文化の価値を考え、自分たちが受け継ごうとする意識を高めるための展開方法が課題である。

## (3) 歴史的文化態度形成型の実践事例分析

東京都の社会科を考える会が取り組んだ第6学年「日本の伝統文化『能』」実践を取り上げて分析する<sup>10)</sup>。

単元は7時間で構成され、日本の伝統芸能である「能」を取り上げ、未来に目を向けて社会に関わろうとする意欲、思考・判断・技能、知識を育てることを目的として授業が構想されている。単元目標は、「世阿弥が完成させた能について調べ、能などの室町文化が今日まで生き続けており、世界の人々からも認められていることがわかる。そして、能は日本の大切な文化であり、継承していくことは大切なことであるということがわかる」と設定されている。第1, 2時間目で能面、能のビデオ、世阿弥の人物年表などから、「世阿弥は、どのようにして能を創り上げ、武士たちを中心とする多くの人々に楽しまれるものにしていったのだろう」という学習問題を設定する。3, 4時目では、学習問題の追求のために世阿弥の工夫や努力、能の起こり、貴族から武士へ文化が広がる時代背景、能の演目や役割などを学習しながら能が多くの人々に楽しまれるようになったわけを考える。更に、海外公演などの様子から能が無形文化財であり、海外からも認められていることについて調べる。

具体的展開は、「なぜ能は現代まで600年も続き、

世界の人々からも認められているのだろうか」という問いを投げかけ、その理由を考えるために作法、舞、謡いなどを能の先生から教えてもらう体験活動の場を設定している。更に、その先生から伝統文化を受け継ぐ大切さや能の世界の話をしてもらう。この体験には、5, 6時間目をあてている。最後の7時間目に、他の国の伝統文化遺産の伝承の様子を知らせ、自分たちが日本の伝統文化である能にどのように関わっていったらよいかについて話し合う学習をしている。

この単元は、「能」という室町文化の典型的芸能を取り上げ、日本の伝統文化への関わり方を自分たちの問題として考えようとする態度形成に結びつく学習活動を組み入れているところに特性が見られる。そのため、ビデオや資料の読み取りに止まらず、能を実際に体験させることによって能自体のすばらしさを感じ取らせようとしている点も特性としてあげられる。しかし、室町文化の学習としては、かなりの指導時間を要している。世界の伝統文化も取り上げて学習しているため、単元「世界の中の日本」との学習と組み合わせる指導時間を生み出す工夫が考えられる。また、社会の動きや人々の生活の中にある文化としての学習を展開することも課題としてあげられる。

## 2 持続的文化教材の実践事例分析

### (1) 持続的文化知識理解型の実践事例分析

ここでは、宇都宮市立上戸祭小学校の3年「むかしをさがそう」の実践を取りあげる<sup>11)</sup>。

本実践は、16時間で構成され、昔の道具を調べたり体験したりする活動が展開されている。単元目標は、「古い道具には、昔の人々のくらしの工夫や苦勞・願いが込められていることに気づき、昔と今のくらしを比べながら、生活の変化について考えることができる」と設定されている。

単元の学習は、昔の道具の年表を造り、七輪の火起こ体験を通して昔の人の生活の知恵を知る。次に、衣食住のグループに分かれて昔の道具について調べる学習が展開されている。ここでは、お年寄りに道具の使い方や苦勞を聞き取り調査している。最後に、「むかしはくぶつ館」を開き、調べたことを年表にまとめる学習をしている。

昔の道具は、現在の道具と比較しながら生活の変化を考える教材構成が可能である。過去と現在を日常生活の様子から結びつけるためにお年寄りからの聞き取りを組み入れている。しかし、学習の展開は、むかしを調べるための過去に学習者の視線が向いているところに問題点が指摘できる。

### (2) 持続的文化価値理解型の実践事例分析

ここでは、地域の人々が受け継いできた文化財や年中行事である「嵯峨狂言」を教材化した京都市立嵯峨小学校の増田佳世氏・徳広知子氏の実践である第3学年「地いきや生活のうつりかわり～地いきにのこるむかし」を分析対象として取り上げる<sup>12)</sup>。

本実践では、「身近な地域の歴史を伝えるものに気づくとともに、それを通して人々が地域のくらしをよくしようと願い、工夫、努力してきたことや、今もなお大切に受け継がれていることを理解する」「歴史を伝えるものを調べるを通して、人々がどのような願いや思いを持って暮らしていたのかについて考えるようにする」が単元目標として設定され、9時間扱いで構想されている。

第1時では、地域行事「お松明」の当日に行われる「嵯峨狂言」に関心を持たせる学習から導入する。まず、地域行事についてのアンケートや写真、地域の情報紙を手がかりに関心を高めていく。

第2時では、嵯峨狂言の現在の映像を見せ、嵯峨狂言の様子を知ったり、イメージを広げさせたりする。次に、20年前と現在で同じ演目、同じ場面で舞われている2枚の写真を提示する。2枚の写真から衣装や面、動作、舞台などがほとんど何もかわらないまま受け継がれていることに気づかせる。更に、嵯峨狂言年表から約700年以上も前から続けられていること、45年前に12年間途絶えたことがあることを読み取らせる。これらの事実から「嵯峨狂言は12年間も途切れたのに、誰がどうやって続けてきたのだろうか」という学習問題を設定する。

第3時から第6時まで狂言堂への取材、保存会、地域の人たちへのインタビューを通して嵯峨狂言はずっと変わっていないこと、太鼓や鉦などの技術が必要なこと、練習が必要なことなどを学習し

ていく。第7時からの3時間にわたって、保存会の人たちは、嵯峨狂言を復活させ、それを受け継ぎ、更に講演回数を増やして多くの人たちに広めている努力をしていることに触れる。最後に嵯峨狂言のよさを知らせる紹介文を書いて学習のまとめとしている。

本実践は、地域文化を教材化し、文化の存在を知るだけに止まらず、地域の人々によって「受け継がれている価値」を理解させるための展開がされているところに特性が見られる。その中で、700年という長い年月を感じ取らせるための嵯峨狂言年表の活用、その形態が変わることのないように受け継がれていることを実感として理解させるための20年前と現在の写真の比較をしている。更に、保存会及び地域の人々からの取材によって「受け継いでいる熱意」を感じ取らせている。それらの追求を生んだ要因は、一度途切れた嵯峨狂言を再興している原因を追及するという過去と現在を結びつける教材構成が効果的であったと考えられる。

しかし、保存会や地域の人々の声に重点を置きすぎているため、学習問題の追及に客観性を欠いてしまう傾向が見られる。また、子供が感じ取った継承の価値を紹介文に止めず、自分の生活に引き寄せ、受け止めた価値を評価し、積極的な文化発展への参画意識を高める学習に結びつけることが課題であろう。

### (3) 持続的文化態度形成型の実践事例分析

ここでは、兵庫県たつの市立御津小学校の中山茂樹氏・前川あすか氏・武内郁子氏の4年生の単元「地域はどのように発展してきたのか～成山新田の干拓」を取り上げる<sup>19)</sup>。

単元は10時間で構成され、地域の成山新田の干拓に関わる「昔・今・これから」を学習対象としている。単元目標は「地域の発展に尽くした先人の働きに関心を持ち、成山新田の干拓に関わった人々の願いや工夫、努力、苦勞、その後の新田の変化等について調べ、先人の働きや苦心を考えることができる」「現在も受け継がれている人々の苦勞や努力を知り、地域の発展を願う意欲を育てる」と設定されている。

単元の展開としては、1～2時間目で学区の地

域の発展に尽くした人やどんなことをしたのかを地図や聞き取りによって調べている。3～5時間目で地域の農業を発展させようとして新田開発を進めた成山徳三郎の開発の様子を資料やフィールドワークで学習する。そこでは、もっこで土を運ぶ体験もしている。更に、現在の水門と新田開発当時の水門を比べて「排水」の大切さについても学習する。洪水の被害で成山新田が破壊されたとき、小学校の子供が義援金を送り、成山徳三郎の思いを受け止めた事実も学習している。8時間目では、成山新田で作られている野菜が、現在ではブランド野菜として高く評価され、多くの人々が野菜作りに励んでいる様子を学習する。まとめの段階では、過去から現在までの地域の変化を紙芝居にまとめながら発展の様子を想像している。

地域の偉人である成山徳三郎の業績に関する学習・成山新田でブランド野菜を生産している現在の様子・時間の流れを捉えさせるまとめの紙芝居という過去・現在・未来を一単元の中で構成している。また、知識習得においては、写真や聞き取りを活用し、価値分析においてはフィールドワーク、資料分析、ゲストティーチャーの語りを組み入れながら学習活動を展開している。まとめの段階では紙芝居作りを通して時間の流れを意識させながら子供たちの考えが未来に広がるように構成している。

これらの要素は、単元名「地域はどのように発展してきたのか」にも表れている。「発展してきたのか」という中には、時間的経過を授業者が意識していることが伺える。また、学習目標にある「発展を願う意欲」という記述には、現在から将来への意識の広がりを願っている授業設計の意図が示されている。しかし、態度形成に結びつくまとめの段階が紙芝居のまとめという学習活動に止まっている。地域の発展を願う子供たちの意見を地域の人たちと交換の場を設定するなどによって、文化発展に対する主体的態度に結びつくような学習活動を組み入れる工夫が課題として考えられる。

## IV 小学校歴史学習における伝統・文化に視点をあてたモデル授業開発

### 1 授業モデル開発の観点

実践事例分析を通して各実践の特性や問題点が明らかになった。それらの分析成果に基づいて6年生の態度形成を重視した授業構成をするための観点を次のように設定した。

観点1－文化内容を身近に感じさせ、学習者の日常生活と結びつけて歴史事象を考えさせるために地域教材を組み入れること

観点2－伝統・文化に関する知識習得に偏らず、態度形成に結びつく文化自体の価値を理解させるための多様な学習活動を組み入れた展開方法を工夫すること

観点3－「過去・現在・未来」の時間軸の上で学習を展開し、文化の継承・発展に着目できるような授業構成を単元を通して構想すること。

観点4－子供が時間の流れを意識できるような教材の構成内容や提示資料を工夫すること

観点5－文化価値理解に客観性を持たせるために体験や口承による学習に偏らないように多様な資料の読み取りを組み入れること

## 2 授業モデルの開発事例

### (1) 室町文化の授業開発モデル事例

①単元名 第6学年 「今に続く室町文化～県無形文化財猿舞と私～」（4時間扱い）

#### ②単元目標

金閣寺や銀閣寺、書院造、茶の湯・生け花などに関する資料を手がかりに中央の文化が全国に広がっていったこと、農民の生活に変化が生まれ、中央の文化の影響を受けながら今に残る祭りや行事などが盛んに行われるようになったことを理解させる。また、それらの文化が現在の私たちの生活や考え方に大きな影響を及ぼしているという文化の価値を地元の無形文化財「猿舞」の伝承を通して感じ取らせ、自分も文化の発展に参画しようとする態度の育成を図る。

#### ③単元構想

伝統・文化を視点とした社会科授業開発の観点を具体化するために以下のように構想した。

(ア) 室町文化を追求するために、室町文化が全国に広がりを見せた具体的事例として地域に残る無形文化財である東光寺の「猿舞」を教材とし

て開発する。

(イ) 室町時代を代表する文化として水墨画に焦点を当て、外部講師の水墨画を描く姿を参観するとともに、自らもプチ水墨画の体験に取り組む。

(ウ) 室町文化の全体をつかむ第1時（知識習得）、体験を通して水墨画を学習する第2時（価値理解）、文化の広がり学習のために農民の間に広がる祭事から猿舞に着目させる第3時（価値理解）、猿舞の価値を感じ・考え、自分なりの地域文化への参画意識を育てる第4時（態度形成）の4時間で単元を構成する。

第1時では、知識習得型として「室町時代には、どのような文化が生まれたのだろうか」を中心課題として設定して学習を展開する。第2時は、価値理解型として室町の典型的文化として水墨画を取り上げる。ここでは、「なぜ、今でも水墨画が人々の間で好まれているのだろうか？」を中心課題とした。第3時も、価値理解型として中央の文化が地方や農民に広がる時代背景と具体的事例としての静岡県無形文化財の東光寺「猿舞」の存在に着目させる<sup>15)</sup>。月次風俗図屏風を提示しながら「農民たちの生活は、どんな様子だったのだろうか」を中心課題として、農民の生活にも変化へをもたらした文化の価値について時代背景とともに理解させていく。

第4時は、第3時までの学習を基盤として地域教材である東光寺の猿舞を取り上げる授業とした。最初に、東光寺の猿舞の人形、本年度の猿舞の様子を放映したテレビ映像と写真の提示から学習活動に入る。

猿舞は、東光寺の日吉神社に伝わる奉納舞として、一説によれば600年も前から伝わっている言われている。この舞は猿楽と田楽の伝承と考えられている<sup>16)</sup>。同じ場所で同じ舞が毎年4月14日に舞われている。ここでは、自分達の生活の中に600年もの間、変わることなく続いていることを理解させる。次に、最初に提示した写真と同じ場所でもとられた50年前の写真を提示し、昔から変わることのない祭りのしきたりが今も伝えられていることに着目させる。そこで、「東光寺の猿舞は、なぜ、今に受け継がれてきているのだろうか」を

表2 単元「今に続く室町文化」の指導展開(4時間扱い)

時	主な問い	指導方法等	児童に身につけさせたい学習内容	他教科との関連
1時・知識習得型	①武士の世の中は、どのように変わったのだろうか。 ②武士の館と銀閣寺の部屋の様子には、どのような違いがあるのだろうか。 ③室町時代には、どのような文化が生まれたのだろうか。 ④どのようにして室町文化は生まれてきたのだろうか。	①教科書 ②資料集能(DVD)	・鎌倉幕府が滅び、足利尊氏が京都に幕府を開いた流れを押さえる。 ・畳や障子など現代の日本風の建物に似ていることに気づく。 ・室町時代に生まれた茶の湯、生け花、能・狂言を取り上げて、その概要を知る。 ・上層武士が京都に住み、公家文化との接触が生まれてきたことを教科書から理解する。	
2時・価値理解型	①雪舟の作品を提示し、自分の絵画と比べて感想を發表する。 ②雪舟は、どんな人物だったのでしょうか。 ③水墨画を描く様子を見ながら自分でも体験してみよう。 ④「なぜ、今でも水墨画が多くの人々の間で好まれているのだろうか？」 ⑤愛好家の人たちの話を聞いてみよう	水墨画絵図(教科書) 水墨画体験	・白黒だけど静けさや奥行きのある情景が表現されている。 ・雪舟の逸話なども含め明から学んだ水墨画が広がったことを知る。 ・専門家の人の絵は素晴らしい、白黒でもいろいろな表現ができる。 ・日本文化を大切にしようと思っている。・水墨画には、日本人に合う落ち着きがある。	単元「日本文化を知らう」茶の湯・生け花・水墨画体験(総合)  単元「和食のススメ」(家庭科)
3時・価値理解型	①応仁の乱の絵図を提示し、世の中の様子を理解させる。 ②農民たちの生活は、どんな様子だったのだろうか？ ②月次風俗図屏風の写真を提示し、農民たちはどのように田植えをしているのだろうか。  ②農民たちの生活は文化の発展によってどのように変わってきているのだろうか。	月次風俗図屏風(教科書) 特産物地図(教科書) 寄合の絵 村祭りの絵(教科書)	・京都の戦乱を逃れて貴族や僧が地方に移り住むようになった。 ・共同作業をしていること、笛や太鼓で楽しみながら作業をしていることなどを読み取る。 ・生産物の種類や収穫量が増え、生活が安定してきたことを資料から読み取る。 ・農作業の手順、水の管理、祭事の協力など部落の自治が高まってきたことを理解する。 また、楽しみを求めて祭りなどの農民文化が農民の生活に影響を及ぼした文化価値について考える。	単元「田植え歌」(音楽)

中心課題し、それらが今もなお受け継がれている理由を水墨画の学習と関連づけながら考える。まとめの段階では、猿舞保存会の人たちに後継者不足、地域住民の伝統文化への意識の薄れ等の問題を投げかけてもらい、文化の伝承・発展に関わる問題意識を高める。更に、自分の問題として将来への取り組みについて考えをまとめ、保存会の人たちに提案する。

## V おわりに

本研究では、社会科における伝統・文化学習が知識習得だけに偏らず、価値理解、更には、態度形成を中核的学習活動に組み入れた授業構成が重要であると考えた。そこで、先行実践事例を授業構成における構成内容と展開方法の視点から類型化した。時間軸に基づいた教材の構成内容を歴史的文化教材と持続的文化教材に分類し、展開方法を知識習得、価値理解、態度形成という視点によって分類することができた。

そして、各類型に位置づけられた典型的実践事例を分析することによってその特性と課題を明らかにすることができた。また、分析成果に基づき

6年生社会科単元「今に続く室町文化～無形文化財猿舞と私」を開発することもできた。この開発モデルは、地域教材による歴史的文化教材として知識習得・価値理解・態度形成の展開方法を組み入れた単元構成とした。また、伝統・文化を将来に向けて自己の文化として継承・発展させていける態度形成も重視した授業モデルとして開発することができた。

しかし、開発モデルは、地域独自の教材を中心に取り上げているため教材の活用方法においては、汎用性に欠けること、価値理解や態度形成の学習活動における評価方法の明示に至っていないことなどが問題点として指摘できる。また、社会科のみならず教育活動全体カリキュラムレベルでの学習展開も求められる。今後は、歴史学習における他単元や他学年における教材開発を進めるとともに社会科を中心にした他教科・領域との関連を図ったカリキュラム開発も課題となる。

## <註>

1) 伝統や文化に関する教育及び授業は、「伝統と文化に関する教育」「伝統・文化教育」「伝統文化教育」



表3 第4時 態度形成型の授業展開「室町文化と東光寺の猿舞」(4時間目/4時間扱い)

時	教師の働きかけと発問	指導教材	*児童の反応 ・学習者に身につけさせたい学習内容
4時・つかむ	<p>①猿舞の人形を提示し、本年度の猿舞がテレビで放映された映像を見せる。</p> <p>②猿舞についてテレビの解説以上に詳しく説明しよう。</p> <p>③猿舞と室町文化はどんな関係があるのだろうか。</p> <p>④同じ場所で昭和50年代にとられた猿舞の写真と昨年とった写真を比較させ、「二枚の写真はどこが違うだろうか」と問いかける。</p>	<p>映像</p> <p>④読み物「東光寺の猿舞」</p> <p>写真2枚</p>	<p>*猿舞に興味集中する。</p> <p>*テレビで放送されるくらい有名なんだ。</p> <p>*猿舞は今から600年も前から東光寺の日吉神社で行われる祭事に奉納される舞だったんだ。</p> <p>*東光寺に住む12才までの男子しか踊ることができない。</p> <p>*神社の祭事として京都から伝わってきた踊りを真似して奉納した。面をつけ舞を舞って楽しんだなど民俗芸能の起源に着目する。</p> <p>*教科書の絵と同時代であることを理解させる。</p> <p>*当時の農民が、豊作を神に願ったり感謝したりする気持ち、農業の重労働を癒す楽しみとして東光寺に住んでいた人たちも猿舞を始めた。</p> <p>*「力をつけた人々」の教科書記述を想起させる。</p> <p>*同じ猿面をかぶって、同じ舞をしている。神様に供えてあるお供物も舞台のつくりも笛を吹いている人も同じ衣装を着ている。</p> <p>*古い写真には昭和54年の旗が立っているけど新しい写真には見学者に僕の友達が写っている。</p> <p>*30年以上も前と去年と同じ舞を同じ場所で舞っている。違うのは舞っている人だけであることから、代々受け継がれていることを理解する。</p>
ふかめる	<p>④東光寺の猿舞は、なぜ、今に受け継がれてきているのだろうか。</p> <p>話し合いの後、疑問に思うことを</p> <p>⑤保存会の人にインタビューをしてみよう。「なぜ自分が受け継ごうと思ったのか」「舞の素晴らしさって何」「受け継ぐことの大変さって何」「受け継ぐ人が少なくなってきた現実」などを話してもらおう。</p> <p>・笛も実演してもらおう。</p>	<p>実物の猿面</p> <p>保存会の人2名</p>	<p>*東光寺ではずっと農業が続けられているため豊作を祈る気持ちを大切にしてきた。</p> <p>*村の団結とか付き合いを大切にしているから続いてきているのだろう。</p> <p>*保存会の人たちが猿面や舞い方、衣装、舞の素晴らしさを子や孫に伝えようという思いで受け継がれ続けてきている。</p> <p>*東光寺の人たちは、600年もの間、受け継いできた人々の思いを大切にしている。人々のつながりを大切にしている。</p>
まとめる	<p>⑥私たちの生活の中で猿舞を含めた室町文化が受け継がれている文化だと思うことについてまとめ、保存会の人たちに考えを提案しよう。</p>		<p>・他のお祭りでも守り続けられている。</p> <p>・畳での歩き方、礼儀作法、客をもてなす心などは茶の湯の人たちが言っていたことと同じだと思うので、心が受け継がれている。</p> <p>・地域の人たちが寄り合って、神社のお祭りを成功させようとしていることは今でも続いている。</p> <p>・小学校で猿舞を練習して地域の人に見てもらおう。(文化祭)</p> <p>・地域の便りに猿舞のPRを掲載する。</p>

など様々な表現が用いられている。中央教育審議会答申では「伝統や文化に関する教育」と表記している。本論においては、伝統や文化、伝統文化の両方の幅広い内容を含む伝統や文化に関する教育及び授業を「伝統・文化」と表記する。

- 2) 中央教育審議会 初等中等教育分科会教育課程部会『教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ』総合教育技術別冊 小学館 2009年
- 3) 文部科学省・国立教育政策研究所「全国学力・学習状況調査小学校集計結果」では、「今住んでいる地域の歴史や自然に関心がありますか」の質問に対して、「どちらかと言えば関心がない・関心がない」と答えた児童が全国平均で約55%の数値を示している。2009年

- 4) 中村哲 編著「和 문화の風を学校に～心技体の場づくり～」明治図書 2003年 pp.29～33
- 5) 田中伸「小学校社会科文化授業の改善～知識を 수용する学習から意味を解釈する学習へ～」兵庫教育大学研究紀要 第33巻 2008年 pp.173～183
- 6) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会科編』東洋館出版 2008年 p.10
- 7) 前掲書2)
- 8) 前掲書6) pp.12～15
- 9) 小坂一郎「朝鮮通信使と江戸時代の文化交流」浅井孝子「文楽と近松門左衛門」第46回全国小学校社会科教育研究大会大阪 大会研究集録 2008年 pp.117～120
- 10) 藤本浩行「江戸の文化をつくりあげた人々」有田

- 和正編『社会科で育てる新しい学力伝統・文化の継承と発展』明治図書 2007年 pp.104～112
- 11) 社会科を考える会「世阿弥と能」日本社会科教育学会全国研究大会自由研究発表資料 2007年 pp.14～17
  - 12) 宇都宮市立上戸祭小学校「響き合う学びの構築～社会とかかわる編～」2009年 pp.85～93
  - 13) 増田佳世氏・徳広知子「地いきや生活のうつりかわり～地いきにのこるむかし」近畿小学校社会科教育研究協議会指導案集 2010年 pp.36～48
  - 14) 中山茂樹・前川あすか・武内郁子「地域はどのように発展したのか～成田新田の開拓～」中・西播磨地区小学校社会科教育研究大会学習指導案集 2007年 pp.36～40
  - 15) 授業モデルは、以下の実践を再構成した拙稿「無形文化財「猿舞」の自作上演による地域交流」中村哲編『和文化の風を学校に』明治図書 2003年 pp.13～22
  - 16) 鈴木正一著「今川氏と東光寺」 1981年 孔芸印刷